

巻頭言

会計とエスペラント語

辻山栄子*

遠い昔の学生時代に一世を風靡していたものの1つに、エスペラント語がある。当時、若者の間でも世界共通語としての人工言語＝エスペラント語の人気は高く、その学習は大学のサークルなどでも英語学習に劣らず人気を博していた。世界中のどの国の言語でもない人工言語によって世界中の人々がコミュニケーションを図れば、これほど公平なことはない。第2次大戦前の植民地時代に自国言語を捨てて支配国の言語を使うことを強要された人々の想いを身近に感じていた当時の若者にとって、それはまさに自由の象徴であり、希望に満ちた当時の時代の空気ともよく馴染んでいた。

むろん、言語と文化の結びつきの深さを指摘し、人工的な言語で世界を統一することに異を唱える意見も根強かったが、その未来がその後これほど無残な運命を辿るとは誰も想像しなかったに違いない。今日では、エスペラント語の存在自体を知らない若者のほうが多いのではないか。今日の世界共通言語は英語であるというのが大方の合意であるし、遠い将来、世界最大の人口を抱える中国語が世界共通言語になる日が来る可能性は誰も否定できないが、将来再び人工言語が世界のコミュニケーションの手段として脚光を浴びる時代が巡ってくると本気で信じている人はいないであろう。まして、全人類が各国固有の言語を捨ててエスペラント語に切り替えることなどありえまい。

よく会計は言語であるといわれる。しかもこの言語は、使われる科目名（単語）こそ異なるものの、それを配置したり変換したりするルール（文法）は万国共通であるともいわれている。したがって、ビジネス言語としての会計言語の世界標準化は案外たやすいと受け止められるのも無理はない。たしかに経済活動を記録する手段として5百余年に亘って使われてきた「複式簿記」といわれる会計言語には、それが当てはまる。事実、それはすでにビジネスの世界では世界共通言語になっている。

しかし「会計基準」の共通化となると話は別である。企業が記録を外部に発信するためには、記録を「総括」する作業が欠かせない。会計記録のアウトプットである「財務諸表」は、企業活動の総括表なのである。会計基準はその総括のルールを定めたものである。いうまでもなく総括には「価値判断」が不可欠である。現在世界で議論されている会計基準の統一化とは、企業活動を総括する価値判断のルールを統一しようとしていることにほかならない。それがけっしてたやすい作業ではないことは、本号に収録されているGCOEシンポジウムの記録をみても明らかである。「単語と文法」の共通化をはかることと、「文化に根ざした生きた言語」を共通化することとは異質のことである。比較可能性のみを重視して基準の統一を形式的に達成しても、結果はエスペラント語と同じ末路を辿ることになりかねない。

ちょうど昨年9月のGCOE公開シンポジウムの開催時期と前後して、日米の証券監督当局は、自国基準と国際会計基準（IAS/IFRS）の差異を縮小（コンバージェンス）するこれまでの作業方針を転換し、自国基準を捨てて国際会計基準を自国企業に義務化（アドプション）するか否かの検討を本格的に始めている。それは米国基準のような特定の国の実務で長い間使われてきた会計基準ではなく、国際会計基準といういわば人工的な会計基準を世界標準にしようとしているという意味で、かつてのエスペラント語の発想を彷彿とさせる。はたして国際会計基準は真の意味での世界のビジネス言語として実務に根付くのか、いずれ消えゆくあだ花か。その前途は混沌としている。

* 早稲田大学商学大学院教授